

「主体性」とは

主体性をシンプルに考えよう

i この箇所は『主体性から理解する子どもの発達』（久保健太著／中央法規出版／2024年）の「はじめに」からの引用です。また、主体性の定義については『生命と学びの哲学』（久保健太著／北大路書房／2024年）の第6章（とくに p.213）も参照ください。

感じる主体性と考える主体性

主体性はこれまで、「様々な選択肢の中から、その人なりの判断基準で「するかしないか」を決めること」だと考えられてきましたⁱ。だから、保育者は「できる限り多くの選択肢」を準備したり、その人がじっくりと「するかしないか」を決めるのを待つことを大事にしてきました。

そうした主体性の考え方に加えて、「様々な『やりたい』『やりたくない』『なんかいい』『なんかやだ』がその人の中に湧き出たり、収まったりすること。そして生きている実感に充たされていること」も主体性と呼ぼうという「新しい主体性」の考え方が登場してきました（ジル・ドゥルーズという哲学者による思想です）。

一緒に鍋をつついたときの「ああ、あったかいなあ」という感覚でもいい。ぎゅっとくっついたときの「ああ、気持ちいいなあ」という感覚でもいい。洞窟を見つけたときの「不気味だけど、不思議だな」という感覚でもいい。様々な感覚がその人の中に生まれては消えていく。そうして、生きている実感に充たされる。そうした働きも「主体性」と考えるという思想が登場しました。

というわけで、整理をすると、主体性には次の二つの働きがあります。

主体性①【感じる主体性】

「やりたい」「やりたくない」「何かいい」「何かやだ」といった、その人ならではの様々な感覚が、その人の中に湧き出たり、収まったりしてしまうこと。そうして、その人が生きている実感に充たされること。

主体性②【考える主体性】

湧き出たり、収まったりしていく感覚を、自分の中で確かめながら、「その人ならではの判断基準」で「するかしないか」を決めること。さらには「その人ならではの仕方（力加減）」で発揮すること。

「入りたいけど、つめたい」

実際の子どもの姿で考えてみましょう。

まずは、右のQRコードから、動画をご覧ください。

動画は、3歳のゆうたくんと2月の海に行ったときの様子です。ゆうたくんの家から、信号をひとつ渡ったところに海があります。ゆうたくんにとっては、赤ちゃんの頃から、自宅の庭のように親しんだ海です。この日も、海に着くなり、ジャンパーを脱いで、さらには靴と靴下も脱いで、そうして裸足になって、波打ち際まで行きました。

しかし、波に足をつけた瞬間、「つめたい！」。そんな感覚が悠太くんの中に湧き出てきます。と同時に「きもちいい！」という感覚も湧き出てきます。

正確に言えば、こうした感覚はバラバラに湧き出てくるわけではなく「つめたいけど、きもちよくて、入りたいけど、入りたくなくて…」といった「ないまぜの感覚」として湧き出てきます。そして、こうした感覚は、「ないまぜ」だからこそ、ゆうたくんに「生きている実感」を与えてくれますⁱⁱ。

そのようにして、自分のからだを通して、世界を感じる。からだと世界が出会ったときに「入りたいけど、つめたい」といった様々な感覚が湧き出ること。

こうした働きも、主体性の働きとして考えようというのが「感じる主体性（主体性①）」の考え方です。これまでは「自分で決めること」「自分で選ぶこと」「行為として発揮すること」が主体性の働きだと考えられてきました。それはそれで大事なのですが、それだけを主体性として考えてしまうと、波打ち際で2分近くのあいだ「世界を感じている」ゆうたくんの姿を、うまく説明できません。



ii 「ないまぜ」の感覚が与えてくれる「生きている実感」。エリクソンは「ヌミノースの感覚（神聖な感覚）」という言葉で、その大きさを論じています。詳しくは、第6章 p.00をご覧ください。また久保健太『生命と学びの哲学』の p.32, p.186, p.227も参照ください。

iii 『主体性から理解する子どもの発達』のp.68, p.69も参照ください。

iv 主体性④に「いる」の主体性をつけ加えてもいいかも知れません。「くつろいでいる」「寝転んでいる」というように、ただ、その場、その時間を「生きている」という主体性です。

v 『生命と学びの哲学』p20-3, p225-31)。大豆生田啓友の「共主体」の考え方や、川田学の主体性論も「個人の主体性」から「関係の中での主体性」へと開いていく考え方ですが、「新しい主体性」の考え方も、同じ考え方に立っています（『子どもが中心の「共主体」の保育へ』大豆生田啓友著／小学館／2023年、『保育的発達論のはじまり』川田学著／ひとなる書房／2019年）。

そこで登場したのが「新しい主体性」や「感じる主体性」の考え方です。新しい主体性の考え方が登場し、様々な「やりたい」「やりたくない」「何かいい」「何かやだ」がその子の中に湧き出たり、収まったりしてしまうこと。その働きも、主体性の働きだと考えるようになりました。

保育者との研究会で、上のような話を伝えたところ、保育者が、すてきなネーミングをたくさん出してくれました。主体性④を「感じる主体性」と呼んで、主体性⑤を「考える主体性」と呼ぶのはどうか、と提案してくれた方がいました。あるいは、主体性④を「ココロが動いちゃうときの主体性」と名づけ、主体性⑤を「アタマを動かすときの主体性」と名づけてくれた人がいました。もしくは、主体性④は「選択肢が、その人の中から湧き出る働き」で、主体性⑤が「湧き出てきた選択肢から、選択する働き」だと言ってくれた人もいましたⁱⁱⁱ。

さらには、主体性④を「なる」の主体性、主体性⑤を「する（しない）」の主体性だと呼んでくれた方もいました。主体性④の働きで「泳ぎたくなる」とか「そろそろ海から出たくなる」とか「おしっこをしたくなる」というような感覚が湧き出てくる。主体性⑤の働きで「泳ぐ（泳がない）」とか「海から出る（出ない）」とか「おしっこをする（しない）」を決めたり、行為したりする。その方は、そう説明してくれました^{iv}。

どのネーミングも、保育者ならではのセンスが生かされた、すてきなネーミングだと思います。みなさんも、自分にじっくりくるネーミングを編み出してみてください。そして、編み出したネーミングを、ぜひ教えてください。

ジル・ドゥルーズは『フォーコー』（1984年）という本の中で「新しい主体性」について論じています。リゼロット・マリエット・オルソンは、その思想を引き継ぎながら「関係的な場としての主体性」という概念を提案しています。「主体性④」は、その流れにある考え方です。それは、「個人が関係をつくる」という考え方ではなく、関係から個人が生まれてくるという考え方でもあります。これまで主体性は「健太くんの主体性」というふうに「個人の主体性」として考えられてきました。しかし、「新しい主体性」や「関係的な場としての主体性」は「健太くん、悠太くん、陽ざし、風、波…とが織りなす場が個人より先に存在して、そうした場の中で、健太くんの主体性が働く」というように「関係の中から主体性が生まれてくる、と考えます^v。

乳児の主体性

「感じる主体性（主体性④）」という考え方のおかげで、乳児の主体性を説明できるようになりました。

自分で決めること、選ぶこと、行為として発揮すること。「考える主体性（主体性⑤）」のこうした働きは、とても大事なのですが、それだけを主体性と呼んでしまうと、乳児の主体性がうまく説明できません。だって、乳児は、大人のように決めないし、選ばないし、発揮しないから。もちろん、最新の研究によって、乳児が「決める、選ぶ、発揮する」を行っていることが明らかになってきました。とはいえ、乳児に「考える主体性（主体性⑤）」を求めすぎるのは難しい。あるいは、乳児に、そのような姿を求めることに違和感を抱く方もいるかも知れません。

しかし、「感じる主体性」という見方であれば、乳児の主体性をうまく理解することができます。乳児は、その子なりのやり方で、世界を感じています。陽射しを感じ、風を感じ、あたたかさを感じ、つめたさを感じています。

むしろ、大人よりも豊かに、世界そのものを感じています。「陽射し」という言葉を知らずに、陽射しそのものを感じていますし、「風」という言葉を知らずに、風そのものを感じています。それが乳児の世界です。彼（彼女）らは、「感じる主体性」のプロと呼んでもいいのかも知れません。「世界は、こうやって感じるんだよ」というふうに、私たち大人に教えてくれている。そんな存在とさえ言えます。

主体性④	主体性⑤
感じる主体性	考える主体性
ココロが動いちゃうときの主体性	アタマを動かすときの主体性
選択肢が、その人の中から湧き出る働き	湧き出てきた選択肢から、選択する働き
「なる」の主体性	「する（しない）」の主体性